



山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA 登山月報 第683号 令和8年2月15日発行



秋吉台(冠山から地獄台を望む)



No.683

2025年度顧問・参与会	2
2025年度定例表彰式	2
2025年度新春懇談会	3
2025年度 山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区) 報告	4
2025年度 地方講習会講師派遣事業(山口県) 報告	5
【SKIMO】2025-26 SKIMO ユースチーム 合宿報告	6
課題解決型アスリート育成パスウェイ構築委託事業フランス合宿 実施報告	8
Enjoy Climbing	9
北海道山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動	10
JMSCA山岳自然の集い2025 報告	11
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば	12

2025年度顧問・参与会

公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会の2025年度顧問・参与会が、1月10日(土)、東京・アルカディア市ヶ谷「鳳凰の間」にて11時30分より開催されました。

田中名誉会長をはじめ、城顧問、本木顧問、八木原顧問ほか、9名の参与の皆様元気な顔を拝見することができました。

町田会長の挨拶後、望月専務理事より2025年度の状況説明が行われました。

短い時間ではありましたが、「顧問・参与には内部情報が十分に伝わってこない」「開催回数を増やし、情報共有を図ってほしい」「現状では協力したくてもできない」といった、叱咤激励を含む貴重な意見を頂戴しました。



2025年度定例表彰式

今回は、スポーツクライミング選手が海外トレーニング中のため出席できない中、加盟団体推薦表彰、指導委員会推薦表彰、スポーツクライミング功労賞の表彰式が行われました。

□加盟団体推薦表彰

木村康男 (香川県山岳・スポーツクライミング連盟)

香川県山岳・SC連盟の理事長、副会長、会長を歴任し、延べ39年にわたり連盟発展に貢献

稲田春男 (新潟県山岳協会)

新潟県山岳協会の会長を6年間歴任し登山普及や安全登山の推進、スポーツクライミング指導者の育成に尽力

佐藤敏雄 (熊本県山岳・スポーツクライミング連盟)

熊本県山岳・SC連盟の遭対理事や副会長として20年以上携わり遭難救助対応や登山ルートの整備など



を推進

□指導委員会推薦表彰

土井祐之 (岩手県山岳・スポーツクライミング協会)

(一社) 岩手県山岳・SC協会にあって長年にわたり登山やSCの技術指導を行うとともに山岳遭難対策にも尽力

西村良信 (兵庫県山岳連盟)

兵庫県山岳連盟の山岳指導委員長として16年以上活躍し指導者養成やJMSCA山岳指導委員会の活動に貢献

木田光彦 (愛知県山岳・スポーツクライミング連盟)

(一社) 愛知県山岳・SC連盟の山岳指導委員長として23年以上活躍し指導者養成やJMSCA山岳指導委員会の活動に貢献

□スポーツクライミング功労賞

山本和幸 (神奈川県山岳連盟)

JMSCA技術委員会・国スポ委員会などでスポーツクライミング競技規則の翻訳や普及、リザルトシステムの構築、国民スポーツ大会S C競技会開催など30年以上にわたりスポーツクライミング界の発展に貢献

＊

代表して山本氏より、「この表彰はスポーツクライミング審判団全員でいただいたものです」とのご挨拶をいただきました。

続いて、廣川登山部長（副会長）より登山部の説明がありました。

次に倉橋スキーモ委員長よりスキーモの報告が行われ、今冬季オリンピックへの出場は叶わなかったものの、着実に実力は向上しており、次回冬季オリンピックでは出場が期待できるとの力強い言葉をいただきました。

最後に、畑中S C部長（副会長）よりスポーツクライミングの現状について説明がありました。



2025年度新春懇談会



定例の表彰式終了後、新春懇談会が開かれました。

廣川副会長の開会のことばに始まり、町田会長の挨拶、来賓として国立登山研修所の米山所長、日本山岳ガイド協会の武川理事長からもご挨拶をいただきました。

顧問の皆様による乾杯の後、懇親が行われ、日本山岳会の飯田副会長をはじめ、関係団体・企業から23名の皆様と親睦を深めました。

加盟団体からは、東京都山岳連盟の原副会長をはじめ、10団体の会長・副会長の皆様、理事・幹事など、全体で71名の方にご出席いただきました。

全体写真撮影を行い、盛会のうちに閉会となりました。令和8（2026）年も、どうぞよろしくお願いいたします。



2025年度 山岳レスキュー講習会 (積雪期・東部地区) 報告

遭難対策委員長 服巻辰則



2026年1月23日(金)～25日(日)に群馬県水上町の土合山の家にて、山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区)を開催した。少雪傾向で講習開催に不安であったが、講習開催前日に大雪となり、無事に充実した講習を開催できた。

講習会参加者数は、クラス1(受講生18名)、クラス2(受講生15名)、クラス3(7名)、講師・スタッフ等(18名)に加え、登山医科学委員会からの見学2名を迎え、計60名となった。例年以上に参加希望者が多く早期に埋まってしまうクラスもあった。

講習のクラス編成については昨年からの全体構成を引き続き採用し、雪崩による遭難の防止から捜索救助、ファーストエイド、搬送までを一貫して学べる内容としている。

クラス1は、特定非営利法人日本雪崩ネットワークと提携し、雪崩ネットワークのAvSAR基礎(雪崩捜索救助基礎:雪崩ビーコン捜索の基礎)とベーシックセーフティーキャンプの両方を一貫して学べる登山者向けのプログラムとした。雪崩の基礎知識を学び雪崩被害に遭わないための学習に加え、雪崩ビーコンを用いた雪崩事故の捜索救助の基礎を学ぶコースとなっていた。講師は、雪崩ネットワークの理事である出川あずさ氏を迎え、雪崩ネットワークの雪崩業務従事者レベル1の資格保持者である委員と共に講師を務めた。

クラス2は、昨年から雪崩事故発生直後の雪崩ビーコンを用いた捜索救助から被災者に対するファーストエイド、ビバーク(待機)対策、搬送まで一貫した流れを学ぶコースとなっている。

登山医科学委員会の上小牧医師や国際山岳看護師である堀香奈委員によるファーストエイドの講習をクラス3と合同で行った。

クラス3は、一歩進んで傾斜地でのロープを使った搬送を主要なテーマとし、雪崩ビーコンによる捜索か

ら掘り出し、梱包、傾斜地の搬送について講習した。講習項目の全てにおいて傷病者への対応はファーストエイド面を考慮して実施することを学んだ。

感想(クラス1・長野県 鳥越 悠美)

ビーコン操作は初心者で、雪崩に対し知識が疎いことに危機感を感じ今回参加しました。

特に印象に残った野外実習で、雪の性質や地形を自らの目で確認し、今後起こりえることを予測して行動することの大切さを学びました。

自分がこれまで気づけなかったことが、今回の参加でたくさん知れたことは大きな刺激にもなりました。

来年度も参加して知識のアップデートを行い、山を安全にもっと楽しみたいと思います。



感想(クラス2・長野県 望月 良)

以前にレスキュー講習を受けっぱなしで、山でリーダーを担うこともあることから、危機感を覚えて受講しました。実際に受講して、反復的な練習と知識のアップデートが必須と痛感しました。また、初対面の方々とチームを組んで悪天候の過酷な環境で安全にレスキューする流れを確認することで、心を鍛える講習にもなりました。今後も練習を継続し、山に関わる者として有事に備えていきます。機会をいただきありがとうございました。



感想(クラス3・新潟県 平賀 貴行)

これまでクラス1、2と参加してきて最後の3年目はクラス3を受講しました。

この講習会は受講回数を重ねる事にまた参加したくなる不思議な魅力があります。共通して言えるのは



「皆さん山が好き」という事です。それぞれの山への想いや考えが交わり意見を出し合いながら、活動するあの時間が私はとても好きでした。他にも土合山の家の豪華なご飯や温泉、交流会など語り出せば尽きないほどの思い出があります。

ここでの学びやご縁を大切にまたどこかの山でお会いできる日を楽しみにしております。

＊

なお、本事業は、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成を受けて開催された。



2025年度 地方講習会講師派遣事業 (山口県) 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

遭難対策委員会では、地方在住者への教育機会の拡大のために昨年度から「地方講習会講師派遣事業」として、要望に応じて遭難対策委員会のスタッフを講師として派遣する事業を行なっている。昨年度は岩手県へ派遣を実施し、今年度は山口県と岩手県からの要望を得て両県へ派遣を行った。このうち山口県への派遣について報告する。

山口県への講師派遣は2025年12月6日(土)～7日(日)に実施され、山口市にあるYMfg維新セミナーパークのクライミング施設を使用して開催された。

二日間のうち、土曜日は山口県山岳・スポーツクライミング連盟のスタッフ向け講習とし、日曜は土曜に受講したスタッフと合同で一般参加者への講習会を開催した。参加者は土曜日7名、日曜日23名であった。

講習内容は、クライミングにおけるセルフレスキューとし、支点構築、ロープワークの基礎、ビレイからの自己脱出、フォロワーのビレイからの引き上げ&引き下ろし、懸垂下降からの登り返し、介助懸垂など、クライミングで遭遇する可能性の高いトラブルへの対応能力を身につけることを目標に講習を行った。

講習に当たっては、スリングの素材の特徴などギアの特性や取り扱いの注意事項を、各種技術についても

有効な使用場面や注意事項などの説明をしっかりと行うことに重点を置き、単なる技術の丸覚えにならないように心掛けた。

感想(山口県 江本正彦)

当連盟内では、クライミングの危険性や安全確保の技術についての理解が不十分なままマルチピッチクライミングにトライし、間違った操作によりビレイヤー自らが転落する事故が発生しています。再発を防止するためには、各自で自らの力量の不足している点に気付いてもらうと共に正しい安全技術を学んでもらう必要があると考え、この度 JMSCA 遭難対策委員会に講習会を開催していただきました。

この度の講習では、無理をお願いしてスリングなどクライミングギアの基本特性や使用時の注意点、マスターポイント構築における流動分散や固定分散の選択についてなど安全確保の基礎についても説明を行っていただいた上でセルフレスキュー技術についての講習を行っていただきました。

講習いただいた内容はすべて、クライミングをする者であれば当然知っていなければならない技術や知識ではありますが、受講者のクライミングの経験年数にも違いがあり、中には初めて聞いた用語や操作方法もあったようで難しいと感じた受講者もいたようです。今回の開催目的の一つが、自らの足りない点や間違っている点について自らで気づいてもらうことでしたので、良い刺激になったと思いますし、今後の学習の動機づけにもなったように感じています。

地方の登山者は、指導経験豊富な有資格者によるクライミングの安全技術講習会等の学習機会はほぼゼロに等しいため、JMSCA 遭難対策委員会の地方講習会講師派遣事業は、ありがたい制度です。今後も、定期的に標準化された最新のクライミングの安全技術を習得できる学習の機会が必要と考えていますので、同制度が継続され利用できることを願っています。



SKIMO

2025-26 SKIMOユースチーム 合宿報告

2025年12月20日から12月23日までの3泊4日の日程で、25-26シーズン初の雪上での合宿を長野県小谷村柵池高原スキー場で実施した。ユース強化指定選手から育成選手までが参加。シーズンインに向けた登行・トランジション・滑走の基本動作の確認を繰り返し行った。また、合宿期間中には、シニア選手らとのミーティングを実施した。ミーティングでは、今シーズンのワールドカップ初戦となったアメリカユタ州でのレースについて、シニア選手らが実際のレース映像、合宿中の様子をスライドでみせ、ユース世代と内容を共有した。世界の舞台で戦う日本代表選手の話や、直接本人たちの言葉で聞く貴重な機会を得ることができた。ユース選手にとっては、競技への理解を深め、海外での合宿・レース参戦へのイメージ、意欲向上につながった。

第2回ユース強化合宿は、2026年1月15日から1月18日までの3泊4日の日程で、長野県白馬村で実施。この合宿は、3月にフランスで開催されるユース世界選手派遣予定選手5名を対象に行われた。合宿では「滑走技術の向上」を明確な目的とした。現在の強化選手たちは様々なスポーツのバックグラウンドを

持つ選手が在籍しており、登行や基本動作については各自の日常環境でトレーニングが可能である一方、雪上での本格的な滑走練習は実施環境が限られる。そのため、本合宿では十分な積雪と多様な地形条件が整う白馬村を開催地として選定した。

合宿初日は、自然地形への対応力や総合的な滑走技術の向上を目的とし、白馬村内の非圧雪エリアを活用し、不整地や樹木が立ち並ぶ斜面において、登行および滑走を繰り返す実践的かつ野性味あふれるトレーニングを実施した。2日目・3日目は佐野坂スキー場にて、ゲートトレーニングに徹した。選手の中にはゲートトレーニングを初めて経験する者もあり、技術面、経験値など刺激のある、非常に収穫の多いトレーニングとなった。今回の試みはスキー専用ギアに限定せず、全選手がアルペンスキーを使用し滑走トレーニングをしたこと。山岳競技においては、総合的な滑走技術と雪上経験・知識が不可欠であり、異なる用具に触れながら滑走経験を積むことも重要であると考えられる。選手たちは用具の違いに戸惑いながらも、短時間で順応し、積極的にトレーニングへ取り組む姿勢を見せた。翌日のゲートトレーニングでは、普段使用しているスキーのギアに戻して練習を行ったが、前日までの経験が即座に反映され、滑走技術の著しい向上が見られた。その成長ぶりには、コーチ陣も大きな手応えを感じる結果となった。





トランジットの動作確認



白馬村さのさかスキー場



合宿最終日は八方尾根スキー場にて不整地および多様な地形を活用した滑走。天候は濃いガスに覆われ視界不良となり、雪質も春雪のような重いザク雪から、場所によっては硬いアイスバーンが現れるなど、対応が求められる難しいコンディションであった。そのような環境下において、選手たちはさまざまな斜面やスピード設定での滑走を通じ、状況判断力と対応力の向上に取り組んだ。選手同士が互いに刺激を受けながら高め合う姿が随所に見られ、非常に有意義なトレーニングとなった。

今回の派遣合宿は、国際舞台の雪上へ選手たちを送

り出す前段階として、非常に重要な位置づけとなる合宿であった。登行技術や基礎動作に加え、これまで強化機会が限られていた滑走技術に重点を置いたことで、4日間という限られた期間ではあったが、選手たちは多様な雪質・地形・用具に対して高い適応力を示し、ユース世代として確かな成長を見せた。本合宿で得られた成果を今後の調整および大会本番へとつなげ、日本代表ユースチームとして世界の舞台へ向かいたい。

(SKIMO 委員 笹川陽子)

● ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピックについて

SKIMO Team Japan は、ミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピック (以下、冬季オリンピック) への出場は叶いませんでした。

冬季オリンピックの出場に向けて、昨シーズンのワールドカップ (以下、WC) から今シーズンの WC 開幕戦まで続いた冬季オリンピック予選 (以下、予選) 全 7 戦を 8 名の選手で、種目をミックスドリレーに絞り、アジア大陸枠獲得に向けて戦いました。

予選中盤、アジア大陸枠は中国にポイントで大幅にリードをされてしまった為、予選終盤はミックスドリレー・ランキングによる出場枠獲得を目指してきました。

しかしながら、最終戦においてポーランドを逆転することができず、残念ながら SKIMO Team Japan はオリンピック出場枠を獲得するに至りませんでした。

SKIMO Team Japan へ、多くの方々からの温かい応援とご支援を頂きまして、誠に有難うございました。2025-26 シーズンの WC の戦いは続きます。引き続き SKIMO Team Japan への応援とご支援をよろしくお願いいたします。

2026 年 2 月 1 日

公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会 (JMSCA) SKIMO 委員会

課題解決型アスリート育成パスウェイ構築委託事業フランス合宿 実施報告

報告者 安井博志

2026年1月3日から11日まで、フランスのトロアおよびフォンテンブローにて、日本代表・ユース日本代表による海外合宿を実施した。本合宿には、日本からユース日本代表選手12名、日本代表選手12名の計24名が参加し、現地ではフランス代表チームのボルダー9名、リード10名の選手が合流した。

課題解決型アスリート育成パスウェイ構築委託事業は、日本スポーツ振興センター（JSC）より委託を受け、2025年度から3年間の委託契約のもと実施しているものである。多くの競技団体が希望する中で本事業がスポーツクライミングで採択されたことは非常に意義深く、国際的な強化活動を推進する貴重な機会となった。

また本プロジェクト名は「ブリッジングプロジェクト」とし、年齢・実力・国境を越えて選手同士をつなぎ、競技力向上を統括的に図ることを目的としている。ユース日本代表選手を主なターゲットとし、日本代表選手はメンター（助言者/指導者）として参加し、技術面だけでなく、思考や感覚、心理的なマネジメントまでを直接伝える構成とした。

フランス合宿前半は、パリ郊外に新設された大規模屋内クライミング施設を有するトロアで実施した。約2000人を収容できる大会対応施設で、国際大会を想定したシミュレーション練習を行った。後半は、フランス代表の強化拠点であるフォンテンブローのカルマクライミングジムにて実施した。寒波と大雪の影響によりアウトドアでのクライミングは叶わなかったものの、屋内施設にて高強度かつ多様な課題に取り組むことができた。

トレーニングでは、ボルダー・リードともにフランスチームとの合同シミュレーションを実施し、スラブやコーディネーションなど、フランスチームが得意とする要素を重点的に取り入れた。加えて、メンターによる講習会、ムーブ理解のための勉強会、国際大会で活躍するセッターからの講習も行い、競技を多角的に捉える学びの場となった。



また、トロアクライミングクラブの協力により夕食会を開催し、フランスの伝統料理とカレーライスを囲みながら国際交流を深めた。選手・スタッフ間の距離も縮まり、相互理解を深める有意義な時間となった。

参加したユース選手からは、「日本とは異なる課題構成で多くの刺激を受けた」「シニア選手と比較することで自分の課題が明確になった」「フランス選手の思考や動きを間近で学べた」といった声が多く聞かれた。メンターとして参加した日本代表選手からも、「教えることで自分自身の理解が深まった」「W杯レベルの課題とフィードバックは大きな財産になった」との感想が寄せられ、世代を超えた相互成長の場となった。

本合宿は、国際的な環境の中で競技力と人間力の両面を高める貴重な機会となった。今後も本プロジェクトを通じて、次世代を担う選手の育成と国際競争力の向上を継続していく予定である。



Enjoy Climbing!

バインター・ブラックIV峰敗退記 連載②

王鞍誓介

9月16日

振り絞るような6日間を過ごした山に背を向け、もうすっかり身体に馴染んだベースキャンプへと戻ってきて丸2日が経った。ゾウのように膨らんだ手足のむくみもようやく落ち着いてきたので、そろそろ楽しみのボルダー探しに出かけよう。

壁の中にいた6日間の記憶は、時間が奇妙に伸びたり縮んだりしている。暗闇の中で理性がバラバラになり、手足の規則的な動きだけが世界となったあの同時登攀は終わりを知らず、ずっと続いてほしいと願った楽しい凹角のピッチは刹那だ。2日目の夜の腰掛けビバークの記憶は虫喰いのようにまだらに抜け落ちている。そのかわり最終日の6日目、下降中のアンカーで夜空を見上げていた数分はやけにくっきりと心に残っている。

夜中の下降は、月夜の脱出行となった。数回目の懸垂下降でいよいよ「ノド」の奥へ潜り込もうとしているとき、隣にいる下田にもヘッドライトを消してもらった。ライトが消えると、月明かりで山の全貌がよく見える。半月とは思えぬほど明るい月に照らされて、巨神兵がはるか上に佇んでいる。60m下で息つく暇もなくアンカーを準備している高柳に申し訳ないと思いながら、その景色にしばし見惚れる。彼はいかにもおだやかな眠りに包まれている様子で、いびきまで聞こえてきそう。今夜はきっと僕らを見逃してくれるだろうという気がした。

昨日の日中は異様な暑さで、巨神兵も機嫌を損ねてそこら中に岩や氷を振り落としていた。落石は下田の頭をかすめ、次には張ったばかりのテントをもう少しでぶち抜くところだった。それが下降をはじめた日のこと。敗退を決めたのは、登攀を開始して4日目の夜だった。昨夜は1日目に整地したテントサイトにもう一泊したのだが、4日ぶりのテン場は驚くほど様変わりしていた。雪が全くないのだ。残された泥と瓦礫の上に無理やりテントを張ったが、まともに寝られたものではない。空爆が始まる夜明けまでに下山を完了しようと真夜中の起床にして助かった。あんなところに一晚中横になっていたら背中穴があいてしまう。

死に物狂いで登ってきた数日を無みにするような悔しさや虚しさは、頭上に浮かぶ月と星々から見れば取るに足りないことなのだろう。薄闇の中で耳をすますと、足元の氷河がプチプチと笑う声が聞こえる。ときどき、パンッと大きくしゃみをして驚かせる。

はるか下からコールが聞こえる。ライトをつけて、確保



©高柳傑



器にロープを通す。集中して、迅速に「ノド」を抜けてしまわなければならない。日が昇り、巨神兵が目覚ましてしまう前に。

僕は巨神兵のすぐ右、切り立った岩壁の中でわずかに雪のついたラインを登るためにはるばるパキスタンまでやってきた。それなのに永いこと待ち望んだヘッドウォールを眼前にしながら、時間切れという情けない理由でその黄金の花崗岩に指一本触れることなくすげすぐと下山してきたのだ。

ヘッドウォールに背を向けて前日に整地したビバーク地へと戻る道すがら、ふと悔し涙がこみ上げてきた。3日目の時点ですでに山頂を踏めないことはほとんど分かっていたながら、お前の負けだと正式に宣告され、思わず自分の弱さに肩を震わせた。クライミングで涙したのはこれが初めてだと思う。まだ下山が待っているのに感情的になるべきではないと分かっていたながら、しばらく止めることができなかった。

全員無事に「ノド」を脱出し、数日ぶりに平らな氷河に降り立って朝日を浴びると、今回は登頂できなくてむしろ良かったのかもしれないと思えてきた。パタゴニア、ペルーとそれなりに成功と呼べる遠征が続いていて、天狗になっていたような気がする。初めてのヒマラヤが、バインター・ブラックIV峰が、容赦なくその鼻をへし折ってくれた。7000mの世界を見てみたいなどと口にするには体力も経験もまったく足りていない。山頂を踏むことはできなかったが、やるべきことが浮き彫りになり、なにより滾るような悔しさを持ち帰ることができた。

気だるい朝日の降り注ぐ中をトボトボと歩いていると、どこかの民謡のような讃美歌のような音楽がかすかに谷中を流れているのを聴いた。おそらく疲れや睡眠不足による一種の幻聴なのだろうが、そのメロディを聴きながらキラキラと乱反射する氷河に立っていると、たしかに清々しい気持ちにさせてくれた。ABCに戻ると、Nisarが迎えにきてくれた。登頂できなかったと伝え、「山はいつでもここにあるから、また来ればいいさ」と笑ってくれた。

山頂を踏めたかどうかにかかわらず、この場所にはまた来ることになるだろう。ビアフォ氷河で過ごした数十日間は、甘美な日々だった。雨降りの日には読書をしたり

絵を描いたり歌を歌ったり、天気が良ければ飽きることなく石ころ登りに興じ、ヘトヘトになれば空や山々を眺めた。あの期間、僕らは無数の人々とつながりすぎる世界からの一時的な離脱を享受していた。僕らが話すことは、過去の記憶と少し先のこと。僕らにとって意味があるのは、半径数kmの事情と海の向こうの大事な人たちだけ。現在は自分だけのもので、社会から切り離されて草木や山や雲とつながっていく感覚があった。



巨神兵 ©高柳傑

北海道山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動

北海道山岳・スポーツクライミング連盟は、1952年10月設立。果てしなく広大で雄大な自然を身近に感じることが出来る北海道。9つの百名山があり、3000M級の山は存在しませんが、市民登山で賑わう低山から奥深い厳しい山まで楽しむことが出来ます。

当連盟自然保護委員会では、夏山の時期に3回の研修・講習を開催しております。

令和7年度には、

- ①羊蹄山登山道整備、京極コース登山道巡視…登山道整備のボランティア活動をしている団体と一緒に登山者目線でササやイタドリ等の伐採作業、ぬかみ整備を行いました。
- ②美瑛富士避難小屋トイレブース点検、清掃…過去10年ほど山のトイレを考える会と協力して毎年開催しております。同時に登山者へ携帯トイレの周知や利用のお声掛けをしています。併せて美瑛富士やオプタテシケ山の登山道巡視も行っております。
- ③環境省猛禽類医学研究所バックヤード見学、釧路湿原キラコタン岬散策…再エネに関して、風力発電建設による自然崩壊をテーマに講習会を開催しました。バードストライクの被害や交通事故や自然破壊の影響を受けた希少猛禽類の保護・治療を行っている研究所に現状を知るため「環境治療の最前線」と題して講演していただき、猛禽類達との共生について考え、活動の周知も大切な事だと気付かされました。実際に訪問した時も研究所がある釧路湿原の周辺では猛禽類達の生息地や動植物の居場所とされる自然豊かな場所で、再エネ（太陽光パネル）建設が行われていました。

＊

小さな力ではありますが、毎年の活動を継続しながら、研修・講習を開催しております。研修・講習以外にも自然保護に関するフォーラムやイベントへの参



加への呼びかけをしております。研修や講習参加についても、指導員をはじめ一般の方も自然保護に興味関心のある方なら参加可能としております。今後登山道整備等が多くなってくると予想され、多くの指導員と一般の登山者を巻き込みながら作業出来る環境を整えていきたいと考えています。

北海道内の山岳会も会員数の減少、高齢化や気候変動による悪天候のため整備作業の遅れがあります。作業協力の依頼もありますので登山道整備と学びも含めて指導員の活動としていきたいです。来年度は、北海道に今も残る「増毛山道」の登山道整備を開削の歴史を学びながら守り続けている増毛山道の会のメンバーと行います。自然観察会として野鳥や外来種等をテーマとした企画もしていきたいと考えています。

(HMSCA 自然保護委員長 高杉有里)



JMSCA山岳自然の集い2025 報告

11月22日午前11時より、埼玉県民活動総合センターにおいて「全国自然保護委員長会議」および「第49回山岳自然の集い」を開催した。対面とオンラインを併用し、全国25都道府県から62名の自然保護委員長および自然保護指導員が参加した。

会議冒頭では、委員長小高より、『登山月報』で連載中の「自然保護委員会のSDGsな活動」は、最新の第680号(11月15日発行)掲載の秋田県まで43県を途切れることなく掲載され、最終の北海道まで継続することが改めて確認された。

続いて、事前提出された報告書をもとに、参加25県からこの一年の特徴的な活動が紹介された。

まず①「登山道整備」では

整備が急がれる危険箇所が多いにもかかわらず、地権者との調整、資金不足、高齢化による人手不足などから、委員会や岳連等単独での登山道整備が困難であるとの声が今年も多く寄せられた。一方で、行政や観光協会、地域住民と協働し、広域的に整備を進める例や、自然観察会・クリーン登山・外岩のクライミング体験なども併せた企画や委員会の山行の際に倒木や危険石を除去して安心安全な登山道を維持するなどの柔軟な取り組みも報告された。

こうした活動をマスコミに積極的に情報提供して、山の自然保護活動についての啓発の場としている例など多彩な取り組みもある。特に高校生が積極的に参加して登山道の整備を継続的に行なっているとの報告は持続可能な活動として注目されたが、火山噴火の影響で継続整備が中断した例もあり、自然災害による山岳環境の悪化が懸念されもした。

近年注目されている「近自然工法」の技術習得研修会が各地で実施される一方、実践に際し、整備前段階の書類手続、文化財保護法に基づいた「現状変更許可」や自然保護法に基づく「工作物の新築」申請などの煩雑さも課題として挙げられた。

②「植生保護」に関し、絶滅危惧種や高山植物の調査、外来種の駆除や自然歩道の除草など行政と連携して継続している例が多く、見守り活動による植生改善の報告もあった。地域や行政との協働が不可欠であることが改めて共有された。

③「観察会や研修会」に関しては、多くの委員会が一般市民向けに開催しており、環境省管理官のレクチャー、刈払機取扱作業安全衛生教育講座、JMSCA



山岳自然の集い

山岳レスキュー講習会(ファーストエイド)などの受講、赤十字救急法救急員の認定を受けるなど、主催者側も知識の研鑽と併せ十分な準備をして開催していることが報告された。

④JMSCA委員会への提言として、登山道整備や自然保護活動に伴う許可申請手順書の整備、携帯トイレの普及、ヤマビル被害情報の共有、メガソーラー規制、新規登録希望者へのレクチャーなどに活用するため『自然保護指導員の手引き』の動画化、熊対策などの安全啓発、指導員高齢化への対応など、多岐にわたる要望が寄せられた。

活動報告の締めくくりとして、2019年の2度に渡る台風災害で荒廃した房総の山の登山道を、日本山岳会千葉支部、千葉県勤労者山岳連盟とともに『房総の山復興プロジェクト』を結成、その代表として整備を牽引している千葉県山岳・スポーツクライミング協会岩崎会長より、市民参加による登山道復興の取り組みが紹介された。

ランチ休憩を挟んで、会議は「第49回山岳自然の集い」に移り、JMSCA 町田会長の主催者挨拶に続き、「山はみんなの宝クラブ」森孝順氏による『山岳環境保全と登山道の維持管理 ～私たちにできることは何か～』との基調講演へと進んだ。講演では、自然公園内登山道の約6割が管理者不在である現状、登山道に起因する遭難が7割を占めること、コロナ禍以降の宿泊登山者減少による減収で山小屋の整備力が低下していること、土地所有関係の複雑さが管理を難しくしていることなどが示された。国・自治体・山岳団体・山小屋が連携する「協働型管理運営体制」が広がりつつあるものの、利用者の少ない山域では維持管理の崩壊が危惧

され、「登山道法」制定の必要性が強調された。また、ゴミ問題の歴史、シカ・クマ問題、外来種対策、森林利用低下、自然保護活動と管理責任など、指導員に求められる幅広い知識が解説された。

休憩後は、昨年改正された「自然保護指導員規程」および「細則」を踏まえ、現在進めている制度見直しと「手引き」改訂版について説明を行った。資格取得には所属岳連等は勿論、ブロック・他の都道府県・JMSCAのいずれかが主催する新規講習会受講が必須であること、指導員は5年間で5回以上の活動を行うこと、更新時には活動報告書の提出が必要であること、手引きは教本兼活動指針としての利用が期待され、WEBに順次掲載していることが報告された。続いて、小島副委員長より、資格管理のデジタル化を目指す「JMSCAフレンド」の現状と運用方針、指導員の登録状況に応じた3種類のログイン方法について説明があった。この3パターンについては、指導員一人ひとりへ準備が整い次第案内されるとのことである。

18時から夕食を兼ねた懇親会が行われ、参加者同士の交流を深めた。

翌23日からは2つのエクスカッションを実施した。雲取山コースでは、元埼玉県警山岳救助隊副隊長の飯田雅彦氏にガイド兼ドライバーとして同行頂き、計11名で太陽寺登山口から入山した。白岩山では人を



白岩山のシカ

恐れないシカの姿に食害問題の深刻さを再認識し、白岩小屋と雲取ヒュッテの廃屋を初めて目にした参加者からは驚きの声が上がった。翌日は時間の都合から同じルートを下山し、三峯神社で安全登山を祈願した。

もう一つの長瀨自然観察会では、「地質学の宝庫」とも「地球の窓」とも呼ばれる長瀨の地質を、埼玉県立自然の博物館元館長の本間岳史氏のご案内で、19名が参加して観察会を行った。

以上、三日間にわたる会議と集いを通じ、全国の自然保護委員会が抱える課題と取り組みを共有し、今後の活動に向けた連携と学びを深める機会となった。

(JMSCA 自然保護委員長 小高令子)



令和7年度 第11回 ハイブリッド開催定時理事会報告

日 時：令和8年1月8日(木)

13時～16時30分

場 所：JSOSビル3F会議室5及びZoom

出席者：

【理事】町田幸男、廣川健太郎、畑中渉、望月啓治、赤尾浩一、小田部拓、(欠席)石井昭彦、吉田春彦、中橋沙羅、星一男、石田英行、武田豊明、原勇人(途中退席)下村真一(15:10から退席)、蛭田伸一、野村善弥、古賀英年、前田善彦、安井博志、小高令子、栗田季慎子、中島隆之、平田伸也(13:30から参加)、奥井健吾(14:00から参加)、藤江理枝、西原斗司男(14:30から参加)

理事出席者25名、欠席者1名

【監事】古屋寿隆、佐久間務

監事出席者2名

1. 開 会

2. 会長挨拶

あけましておめでとうございます。令和7年度も残り3か月となりました。今年度末策定予定の中長期計画については、理事の皆さんとコミュニケーションをとりながら

進めていきたい。また、次年度当初予算の作業が進んでいるが、予算管理は各委員会委員長の責任で、それを監督するのは担当理事なので、担当理事は自分ごととしてとらえ、スピード感を持って対応していただきたい。本日もよろしくお願いします。

3. 会議成立状況報告

理事数26名中23名出席(通し出席20名、途中入・退席5名)

監事数2名中2名出席

(定款第33条、定足数=14名(過半数以上))

4. 議長選出

会長が議長をつとめる(定款第32条)

5. 議事録署名人

会長及び監事(定款第34条)

6. 議 題

議案第1号 前回理事会議事録の承認について

すでに、内容の確認は完了しており以下のとおり承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

議案第2号 事務局テレワーク開始に伴うテレワーク就業規則の変更について

赤尾事務局長が、従来のテレワーク就業規則の一部変更(通信費の費用はJMSCAが負担しないこと)の説明をし、以下のように異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

議案第3号 令和8年度のコーチ等設置事業における要望額調査に係る選考委員会の設置について

望月専務理事が、JOCのコーチ等設置事業のコーチの選考のために委員会を設置する必要性を説明し、設置要項に基づき委員会を設置することについて異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

また、選考委員候補10名についても提案され、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

更に、1月22日が返答の締切であることから時間がないため当委員会での結論をJOCに返答することを理事会から委任された。

議案第4号 令和8年度当初予算作成の方向性について

望月専務理事が、各委員会から出された予算見積りの集計結果を説明し、支出見込みに対し収入(財源)不足となっていることを確認するとともに、今後は財源内に収めるため委員会毎の予算査定を財務委員会で行うこととし、その権限を理事会から財務委員会に委任すること、の確認がなされた。

議案第5号 主要SC競技会開催業務委託契約に関する契約準備行為の実施について

望月専務理事が、これまでの経緯と現在

の業務委託は6月から翌年5月の1年契約で既に2年以上が経過していることを説明した上で、何らかの形で公募することを提案し、以下のとおり承認された

棄権1名(石田) 反対0名 賛成24名
議案第6号 全国理事長会議への対応について

望月専務理事が、2月8日開催の会議における議題の再確認と、現時点で地方岳連・協会から出されている質問と対応方針を示した。また、地方岳連・協会の現状を聞くほか、全日本登山大会に関する意見を聞くことについて採決を取り、以下のとおり異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成24名
議案第7号 港区SC普及事業(3月実施予定)について

栗田理事が、次年度から港区と連携して新規に開始する事業に関連するものとして、本事業を実施する背景と本年度中に実施する意義について説明した。また、予算30万円は、マーケティング委員会がSC普及関連で新たに獲得したスポンサー関連資金を活用することを小田部常務理事が説明し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成25名

7. 報告

報告第1号 12月末時点の収支・キャッシュフローの状況及び令和7年度収支決算の見通しについて

赤尾事務局長が、12月末時点のキャッシュフローの説明をした。また、望月専務理事が、令和7年度最新の収支見込を説明し、令和6年度に比べ収入が減っていること(協賛金、交付金減)に対し、人件費、減価償却等の固定費・総務管理費は急激に減らせないことから、支出が収入を上回る見通しが強まっていることを説明した。

これに関連して、佐久間監事から、今期の財政状況について懸念を示し、少しでも良い方向に向かうよう対策の必要性を述べた。

報告第2号 SCコーチの認定について

望月専務理事が、常務理事会で、以下のSCコーチの認定がされたことを報告した。

■京都会場 コーチ2 合格5名

①宮田 尚文 ②尾川 智子 ③中嶋 涉
④窪田 修平 ⑤抜井 亮瑛

■神奈川会場 コーチ2 合格6名

①橋本 今史 ②木村 理恵
③中村 彰太 ④青木 達郎
⑤大槻 哲也 ⑥小澤 保志

■保留者の再検定(コーチ1) 合格3名

①荒谷 俊大(茨城会場) ②川合 健史(神奈川会場) ③鎌田 智子(岩手会場)

＜PF開催＞

■佐賀県山岳・スポーツライミング連盟 6名

①怡土 ゆき絵 ②伊原 広茂

③大河内 芹香 ④中上 太斗

⑤樋口 結花 ⑥前野 紘希

■兵庫県山岳連盟 11名

①尾崎 竜平 ②石田 幸利

③水谷 有貴子 ④福田 裕子

⑤山藤 和輝 ⑥宮内 泰英

⑦長谷川 亜沙美 ⑧高力 秀幸

⑨河面 信也 ⑩西本 陽子

⑪蘆田 恭卓

報告第3号 SKIMOにおける1月～3月の海外派遣する選手及びコーチについて

小田部常務理事が、配布資料を基に今後の海外派遣計画について報告した。

◎1月15-16日

ワールドカップ第2戦フランス・クーシュベル

◎1月25-26日

ワールドカップ第3戦アンドラ

◎1月31-2月1日

ワールドカップ第4戦スペイン・ボイトウル

◎3月19-22日

ワールドカップ第6戦イタリア・バロバロテッロ

◎3月25-29日

ユース世界選手権 フランス

報告第4号 2026年スポーツライミング日本代表選手及び国際競技大会派遣選手の選考について

畑中副会長が配布資料の内容と速やかにホームページで公表することを報告した。

報告第5号 Letter from UIAA(気候変動対策アンケート)について

望月専務理事が、配布資料を基に説明し、3月末までに登山部が取りまとめて返答することになったことを報告した。

報告第6号 UIAAの3委員会へJMSCAから3名を推薦することについて

望月専務理事が、常務理事会で3名を推薦する方針を決定し、それを踏まえてUIAA委員会で推薦書類の準備を行い、書類がそろったところで改めて理事会で承認を得る流れであることを報告した。

報告第7号 顧問・参与会及び新春懇談会等の実施について

望月専務理事が、現在の準備状況を報告した。

報告第8号 今後の役員派遣ほか渉外等について(1月後半～2月)

◎1月31日(土)～2月1日(日)

ボルダージャパンカップ2026(BJC2026)

◎2月14日(土)～2月15日(日)

スピードジャパンカップ2026(SJC2026)

8. その他

・IFSCから各NFに来ているガバナンス整備状況のアンケートについて、回答期限(1月8日)が迫っていることから、赤尾事務局長がSC部側へ督促をした。

・HPに掲載されている医科学講習会について、令和7年度事業として正式に事業化(予算化)されているかの指摘があったが、黒字化が期待される事業として計画・予算化されていることが確認された。

以上

令和8年1月8日(木)

記録 赤尾浩一



寄贈図書

兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第703号	会報	COREAN ALPINE CLUB	「山」2025.12 VOL.294	会報
三峰山岳会	「岩つばめ」377号	会報	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」2月号 No.944	情報誌
(一財)日本スポーツマンクラブ財団	「会報」第184号	会報	認定NPO法人 富士山測候所を活用する会	「芙蓉の新風」Vol.20	会報
(公社)日本山岳会	「山」2025年(令和7年)12月号(No.967)、1月号(No.968)	会報	(公財)日本スポーツ協会	「Sport Japan」vol.83	会報
(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 573	会報	清手 康史	「緊急時に登山者はどう行動すべきか」	寄贈本
日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.110	会報	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第382号	会報
明治大学山岳部炉辺会	「炉辺通信」No.209	会報	(公社)東京都山岳連盟	とがくれん通信 2025年4号	会報
中華民国山岳協会	「中華山岳」季刊302	会報	おいらく山岳会	「山行手帖」No. 794	会報
(株)山と溪谷社	「山と溪谷」2 2026 February	情報誌	(株)山と溪谷社 山岳図書出版部	「地図バカ直伝 地形図の楽しみ方」	寄贈本

「かすみちゃんのハイキング日記」



表紙のこぼ



秋吉台（冠山から地獄台を望む）

秋吉台は山口県西部に位置し日本最大級のカルスト台地で特別天然記念物に指定され、見渡す限りの草原に白い岩肌が露出した石灰岩を各所で見ることが出来る。カルスト台地とは、水に溶けやすい石灰岩などが雨水や地下水によって浸食されてできた台地で、秋吉台の地下には巨大な鍾乳洞が多数散在している。2007年にはこの台地において『おいでませ3億年の夢眠る草原へ』と題して第46回全日本登山体育大会を開催しケイビング(洞窟探検)も実施した。

2026年1月3日撮影
山口県山岳・スポーツクライミング連盟
会長 古林喜明

編集後記

山岳会の雪上訓練は、雪が少ないという思わぬ状況から始まった。土合山の家周辺での実施を予定していたが、天神平へ変更してテント泊する。翌日は実践登山を計画していたものの、強風により登頂を断念。その結果、雪と向き合う二日間の訓練となり、内容はより濃密なものとなった。

翌週は、同じ土合山の家で積雪期レスキュー講習会を開催。大雪予報に身構えたが、天候は比較的穏やかで、時折晴れ間ものぞいた。しかし最終日は一転して大雪となり列車は運休。吹雪の中で遅れるバスを待つ時間が自然の厳しさを実感でき、二週にわたり天候に振り回される事となった。(松本光顕)

登山月報 第 683 号

定 価 110 円 (送料別)
予約年間 3,000 円 (送料共)
(毎月 1 回 15 日発行)
発行日 令和 8 年 2 月 15 日
発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
Japan Sport Olympic Square 905
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電 話 03-5843-1631
F A X 03-5843-1635

山岳
雑誌

岳人

がくじん
山と人、時代をつなぐ『岳人』

3月号
販売中

【特集】岳人が選んだ

ご当地アルプス50選

モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて販売中!

毎月15日発売 価格1,100円(税込)



▶年間購読が断然おトクです!

年間購読
通常特典

購読割引

送料無料

限定品プレゼント

さらに

モンベル
クラブ
会員さまには

モンベルポイント

5,000P プレゼント!

モンベルクラブ会員さままで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典

岳人オリジナル手ぬぐい



岳人の表紙絵を描く
中村みつを氏のイラストを使用!

岳人
カード

全国2,300ヵ所以上で
ご優待!



全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組めます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
 	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギーの普及支援 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング 	 	<ul style="list-style-type: none"> 健康づくりの支援 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応 	 	<ul style="list-style-type: none"> 次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） 災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



日山協山岳共済会のご案内

**安全登山は登山者の努め、
山岳保険は義務。**

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2024年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
(2025年6月19日)

発生件数	2,946 件 (前年対比 180件減)
遭難者数	3,357 人 (前年対比 221人減)
死者・行方不明者	300 人 (前年対比 35人減)



2025年版

日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.jp)

